

## 第1回栄村むらづくり懇話会

### —産業振興部会—

#### 【意見集約】

- ・ 総合振興計画について、この懇話会の立ち位置はどこにあるのか。  
→現状をとらえて、どうしたらよいのかという原案を考えること。審議員の決定が全てにはなる。
- ・ 問題と課題を見出すと聞いてきたが。  
→今回は現状と問題を皆さんで把握してもらいたい。
- ・ 課題の方向性までは決めないということか。  
→決められれば理想だが、ここに無いものも出せれば。
- ・ 課題そのものはその通りだと思う。それよりもどうするかということのほうが大事だと思う。
- ・ 数字で表したときの比較などを考えなければならないし、具体的な数値目標を掲げなければならないのではないか。これまでは文字の羅列であり、検証ができていなかったと思う。  
→これは本当に基本計画。その後、過疎計画や5年計画、実施計画が来る。実施計画の時には具体的な数字が出てくる。この計画はその方向性を決めること。
- ・ 前回までの計画の成果というのはわからないのか。  
→いまのところない。
- ・ 同じ失敗を繰り返しているだけなのではないか。基本計画でも、目指すべきところを明確にすべきではないか。  
→そこは行政の悪いところだと思う。こうした悪いところを直すにはどうしたらよいのかという絵を描きたい。
- ・ 農業について。栄村で盛んにしようとしても、ブランド牛はじめ数件の農家の話。そういった取り組みが横に広がることを考えないと何の発展性もないのではないか。そういった面で考えると、旧誘致も含め、農地をどのように広げていくか、活用するかということが大事なのではないか。例えば、空いている土地情報を公開するだけでもやる気のある人にとっては有意義なものになる。目に見えるかたちで出してもらうことが第一だと思う。農業に携わっている人が一番多いので、農業を元気にすることが最も近道ではないか。  
→宣伝することがいるのは良いが、総合戦略の中にある人口推移と10年後の姿に対して、どうするかということが大事ではないか。
- ・ 一番は少子高齢化と人口減少は、すべてのものに通じている。それはもうからないこと。儲けることができればいいはなしで、川上村では現に人口が増えている。その原点を理解しなければ無駄。余計な金は使わず、思い切った農業政策をしないと。努力もしなければいけないが、魅力ある農業とは儲かることが前提にあるのでは。儲かるという表現

は正しくないかもしれないが。

- ・ 年収 1000 万円、それくらいにならないと農家として人は残っていかない。既にそれができないということで親世代はみな出て行ってしまっている。だから新しいものをつくらなければ。
- ・ 人手不足というのは違うと思う。川上村のようにやるというのはどういうことなのかということ突き詰めなければいけないのではないか。
- ・ 米を作るなら作るでも良い。しかし、その場合、ただのライスセンターにするのではなく生産・販売・保管等全てを突き詰めなければ。川上村はそこができていますが、栄村はそればできていない。
- ・ 米にしても、儲けのために行っているわけではなく、皆赤字になっているはず。田んぼがあるから集落としてやらなければならないだけ。そう考えると、米は難しいのでは。文化であり、観光の目玉にはなるかもしれないが、集約するためにほかの農業とかを捨ててしまうのは危険。  
→街中では薪ストーブの需要もあることから、農作業の報酬を薪にするというのも一つ。そういった新しい考えが必要では。
- ・ 儲かる農業は大事だと思うが、そうでない集落に入ってくるような若者がいるという状況もある。そうった人たちがなぜ栄村に来ないかという施策がない。若い人たちは、条件などを比較にしてやってくる。村にはそういったものも必要ではないか。
- ・ 須坂市のように、栄村も外部に目を向けた取り組みが重要ではないか。また観光農園は利益率が高い。これを村でやる方向性を出してもらうのはどうか。
- ・ 観光農園はどうかという話は若者からも出てくる。しかし、人がいないとそれもできない。人がいないと仕事ができない、仕事が無いと人が来ない。ハローワークに来る人は条件が合わない。しかし、地域おこし協力隊として良い人材が揃った。自治体が PR してくれるといい結果が出るのではないか。  
→地域おこし協力隊は自分で課題を持ってくる。それが違いではないか。
- ・ 山菜園にしても、観光農園しても、実行するのは人。行政に頼ってばかりでは駄目。
- ・ 百姓は本当にやる気がある人でないと駄目。やはり大事なものは人。
- ・ やはり地域おこし協力隊の活用が必要ではないか。自治体で募集をかけて、民間に委託できないか。  
→協力隊は全国で人気が高まり、募集をかけても人が集まらない。
- ・ 地域おこしにしなくても、自治体で収入保障をして一定期間採用するという方法も良いのではないか。
- ・ 空き家対策というが、行政が住宅を提供しても若者は来ない。来るのは老夫婦。そういった住宅はもうないのか。  
→あるとすれば昔の教員住宅。
- ・ 人口が増えないことには何もできない。人が来れば全然違う。

- ・ 農業だけでなく、十日町や津南町のように、村の資材をつかって自由にオブジェをつくってもらなども良いのではないか。  
→昔そういう人がいて、オブジェは多くある。しかし、趣旨が異なる。補助金を目的としたものではなく、芸術家として作ったもの。
- ・ 津南町などの芸術祭は、外からの人間を受け入れているだけではなく、地域の人がやっていることに意味がある。小滝では、ワークショップを開催し、どのような地域にしたかを話し合っている。その地域にするにはどうしたら良いかを話し合うなどしないと難しい。
- ・ 住人を引き出すのが行政の役目だと思う。この人口がバラバラになってしまえば何もできない。もっとまとまってマンパワーをかけることが一番大事ではないか。そのリーダーシップを行政に求められるのでは。最終的な出口は一つでいいと思う。皆がまとまらなると何もできない。気持ちが一つになるだけでできることはたくさんあると思う。  
→目標をもつてくことは大事。現在考えていることはブランド化。何かテーマを決めて取り組むのも一つだと思う。それを誰に売りたいかを考える、どういう人にどういうものを売りたいかを考えるブランディングをすればいいのではないか。
- ・ 地域ブランドについて、有機農業をやっているということを前面に出し、それほど大変なことではないのだということを出していけばブランドになると思う。
- ・ 地域のブランドというが、何がブランドなのか。地域にしかなく、お金に換えられることができ初めてブランドといえるのではないか。
- ・ ブランドにするには味も重要。例えば米でも、堆肥をあげても収穫量を上げることはできない。だからやらない人もいる。
- ・ 木島平村の米もそうだが、米が賞を取ったとしても東京の水で炊けば不味くなってしまふ。そういったことも含めてブランド化ということも考えなければならない。北海道にもあるが、水とセットで売るというのも一つ。
- ・ 自立の村を目指すというのであれば、行政に頼んではいけない。やるのは個人。
- ・ 良いアイデアはよく出る。しかし、そういった話が出たとしても「誰がやるのか」といつも思ってしまう。

以上